

研究ノート

政治的イデオロギーの個人差と極性化に関する研究動向

吉田綾乃

東北福祉大学

要旨

本稿の目的は、政治的イデオロギーの個人差と極性化に関する研究動向を概観し、極性化を克服するための研究アプローチについて考察することである。始めに、政治的イデオロギーに関する個人差を予測する心理学的理論として、ジョナサン・ハイトが提唱した「道徳基盤理論」と、ジョン・ジョストが提唱した「動機付けられた社会認知仮説」に基づく研究知見を紹介した。また、政治神経科学 / 神経政治学が明らかにした、政治的イデオロギーに関わるパーソナリティ、認知的傾向、生理的傾向、脳機能や脳構造の特徴に関する研究成果について概観した。次に、政治的イデオロギーによる極性化を引き起こす要因として、党派性バイアス、エコーチェンバー、政治的マイクロターゲティング、バックファイア効果、非人間化に着目し、極性化を克服することの困難さについて指摘した。最後に、政治的イデオロギーによる極性化を克服するための研究を行う上で、今後、必要となる視点について論じた。

キーワード：政治的イデオロギー、極性化、道徳基盤理論、動機付けられた社会認知仮説、党派性バイアス

はじめに

政治的イデオロギーの違いは、人々の意見が不一致となり、対立することの主な原因のひとつである。今日、政治的イデオロギーによる社会の分断、すなわち極性化 (polarization) が加速しており、その対応が急務であることが指摘されている¹⁾。この問題に取り組むためには、リベラルあるいは保守という政治的イデオロギーに傾倒する個人はどのような心理的特徴が認められるのか、なぜ人はリベラルあるいは保守に傾くのか、また、政治的イデオロギーに基づく極性化を解消することがなぜ困難であるかについて心理学的な理解が不可欠である。これまで、人々の政治的イデオロギーは、家族やコミュニティの態度や信念、メディア接触などの影響を受けていることが示されてきたが、過去25年の間に、心理学、政治学、神経科学を結び付けた学際的研究が展開され、政治的イデオロギーの個人差に神経生物学的メカニズムが媒介していることが明らかになった。本稿では、政治的イデオロギーの個人差に関する心理学理論と神経政治学の研究を概観する。また、政治的イデオロギーによる極性化が生じるメカニズムと、極性化を克服することの困難さを示した研究知見を踏まえ、分断を解消する方法を検討する上で必要な視点について考察を試みる。

1. 政治的イデオロギーの個人差を予測する心理学的理論

1.1 道徳基盤理論 (moral foundation theory)

バージニア大学の社会心理学者であるジョナサン・ハイトは、道徳の感情的基礎や文化との関連について研究を行い、人間には5つの根源的な倫理観の要素があると主張する道徳基盤理論を提唱した²⁾³⁾。「傷つけないこと (harm reduction / care)」、「公平性 (fairness / justice)」、「内集団への忠誠 (loyalty to

one's in-group)」、「権威への敬意 (deference to authority)」、「神聖さ・純粋さ (purity / sanctity)」という5つの道徳基盤は、人類が同じ社会に所属する他者と協力する環境の中で進化適応してきたことにより獲得されたものであり、生得的な人間の特徴を表していると主張されている。また、これらの道徳的な倫理観は人類に共通した普遍性をもつ感覚であり、異なる文化圏における倫理的規範もこれらの概念に帰属すると仮定されている³⁾。

Graham ら⁴⁾ は政治的イデオロギーと道徳基盤の関連を検討した。アメリカ人約2万人を対象に5つの道徳基盤をどの程度重視するかを問い、人々の政治的傾向がリベラル、リバータリアン、宗教的左派、保守の4群に分類できることを報告している。リベラルは、「個人の尊厳 (Harm, Fairness)」得点が高く、「義務などへの拘束 (In-group, Authority, Purity)」得点が著しく高いという、無宗教でリベラルな人に見られる典型的なパターンである。リバータリアンは、個人の自由を最も重視する政治的思想を持つ群であり、個人の自由を最重視するために「義務などへの拘束」得点はリベラル同様に低い。また、自由競争によって生じる経済的格差を肯定するため「個人の尊厳」得点は保守と同等に低いパターンである。宗教的左派は、リバータリアンと反対に全ての項目の得点が高く、個人レベルでも社会レベルでも倫理的責任感を強く感じている群である。保守は、リベラルと反対に「義務などへの拘束」得点が高く、「個人の尊厳」得点が低い群である⁴⁾。なお、各群のサンプルサイズは、リベラルが5,946名、リバータリアンが5,931名、宗教的左派が6,397名、保守が2,688名であった。また、Haidt⁵⁾ は、リベラルが最も重視する価値は、抑圧の犠牲者に対するケアであり、「個人の尊厳」に重きを置いていること、保守は道徳共同体を維持する制度や伝統の保護を最も重視しており、「社会の秩序」や「義務などへの拘束」を重視していると指摘している。

本邦では、村山ら⁶⁾ が、Graham ら⁷⁾ が開発したモラル・ファンデーションズ・クエスチョネア (Moral Foundations Questionnaire; MFQ) の日本語版を作成し、その妥当性と信頼性の検討を行っている。そして、日本でもアメリカと同様に5因子構造が最も高い適合度を示したが、原版ほど5つの道徳的基盤の間に明確な差異が認められないこと、「純粋さ (sanctity)」の項目の信頼性が低いことを見出した。一方で、5因子の上位概念である、「個人の尊厳」と「義務などへの拘束」については、政治的志向との関係性が原版と同様に確認された⁶⁾。これらの道徳基盤は、長期的に自己報告の結果が安定しないこと、政治的イデオロギーのその後の変化を予測できないという課題も指摘されているが⁸⁾、道徳的な態度は、政治的イデオロギーの個人差を予測する説明要因のひとつであると言える。

1.2 政治的イデオロギーに関する動機付けられた社会認知仮説 (the theory of political ideology as motivated social cognition)

システム正当化理論の提唱者としても知られるニューヨーク大学の社会心理学者のジョン・ジョストが2003年に発表した「動機付けられた社会認知としての政治的保守主義 (Political Conservatism as Motivated Social Cognition)」論文を契機に、保守あるいはリベラルに傾倒する人にどのような心理的特徴が認められるのかについて、飛躍的に研究が進んでいる⁹⁾。彼らは12カ国で行われた88件の研究をメタ分析し、「死の不安 death anxiety (加重平均 $r = .50$)」、「システムの不安定性 system instability ($r = .47$)」、「独断主義-あいまいさの不寛容 dogmatism-intolerance of ambiguity ($r = .34$)」、「順序・構造・閉鎖への欲求 needs for order, structure, and closure ($r = .26$)」、「脅威と損失への恐れ fear of threat and loss ($r = .18$)」が政治的保守主義を強めること、対して、ビッグファイブの「経験への開放性 openness to experience ($r = -.32$)」と「不確実性の許容 uncertainty tolerance ($r = -.27$)」、「統合的複雑性 integrative complexity ($r = -.20$)」、「自尊心 self-esteem ($r = -.09$)」が政治的保守主義を弱めることを明らかにした⁹⁾。

また、環境への不確かさや、近隣国からの軍事威嚇などの生存を脅かすような恐怖を感じることで、それに対処する必要性を感じる個人にとっては、保守的なイデオロギーがより魅力的で心地よく感じること、対して、社会の不確かさや生存を脅かすような恐怖を感じない人はリベラルな思想に共感する傾向があることを示した¹⁰⁾。そして、「不確かさを減らし秩序と閉鎖の感覚を求める認識論的動機 (Epistemic Motivation)」と「脅威や不安を減らし安全と安心の感覚を求める実存的動機 (Existential Motivation)」という2つの動機が社会変化への抵抗と不平等の受容を介して、保守的な政治的イデオロギーを高めることを実証している⁹⁾¹¹⁾。

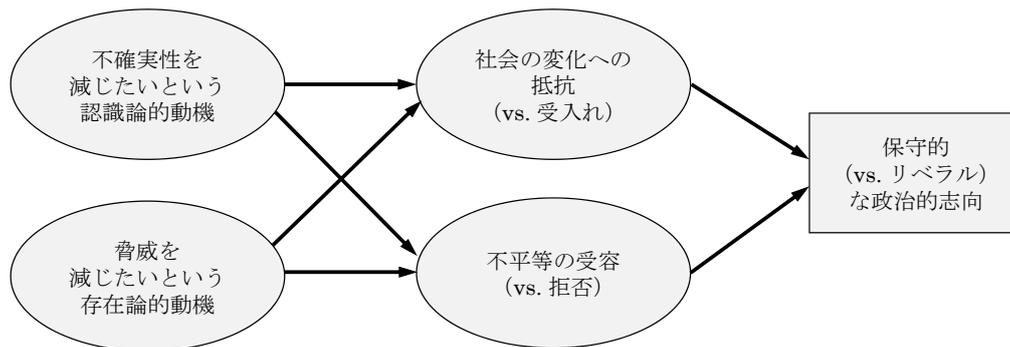


Fig. 1. 動機付けられた社会認知仮説の理論モデル
Jost ら¹¹⁾ より筆者が翻訳

Jost¹²⁾ は、認識論的動機に関する181件の研究 (13万人の参加者を含む) と存在論的動機に関する約100件の研究 (36万人の参加者を含む) という、2003年よりも豊富なデータベースに基づいて、保守とリベラルの心理的傾向について詳細なメタ分析を行った。そして、「独断主義の尊重 (respect to dogmatism)」、「認知・知覚の硬直性 (cognitive / perceptual rigidity)」、「順序・構造・閉鎖への欲求 (personal needs for order / structure / closure)」、「統合的複雑性 (integrative complexity)」、「曖昧さ・不確かさの許容 (tolerance of ambiguity / uncertainty)」、「認知欲求 (need for cognition)」、「認知的熟慮性 (cognitive reflection)」、「自己欺瞞 (self-deception)」、「脅威に対する主観的知覚 (subjective perceptions of threat)」に関して、政治的イデオロギーによる非対称性が存在することを報告している。さらに、テロ攻撃、政府の警告、人種人口動態の変化など、客観的に脅かされる状況にさらされることは、世論をおだやかにではあるが保守的に変化させる一因となることを明らかにしている。加えて、リベラルよりも保守には、現実を共有したいという願望、グループ内のコンセンサスの認識、集団的自己効力感、社会的ネットワークの均質性、そして自分の政党が政権を握っているときに政府をより信頼する傾向があることを示した。認識論的動機、存在論的動機に加えて、他者との関係を求める動機においても保守とリベラルにはイデオロギーの非対称性があることが確認されたと言える¹²⁾。

2. 政治神経科学 / 神経政治学の貢献

政治的現象を理解するために、認知神経科学の理論とツールを組み込むことの重要性が指摘され¹³⁾、今日では神経政治学 (Neuropolitics)、政治神経科学 (Political neuroscience) と呼ばれる政治学、心理学、認知科学、神経科学など複数の研究領域を融合した新しい学際領域が構築されている。これまでに、人種的偏見や集団間関係、政治的イデオロギー (保守主義 / リベラル) の差異、政治的態度の構造など、様々なトピックに関する研究が行われている。政治神経科学が用いる革新的な方法により、政治的認知、評価、判断や行動に関する生理学的プロセスの理解が進んでいる。

例えば、Oxley ら¹⁴⁾ は、軍の支出や愛国的行動を支持するか、といった質問を用いてリベラルと保守を群分けした。そして、不快画像や、急激な音刺激等に対する無条件反射反応を測定する驚愕反応テストに対する生理的反応を比較した。その結果、リベラルよりも保守が、強い生理的反応を示すことを見出している。また、Carraro ら¹⁵⁾ は、感情的ストループ課題を保守とリベラルに対して実施し、リベラルよりも保守的な者は、否定的、脅迫的な刺激により多くの注意を向ける傾向があることを確認している。Amodio ら¹⁶⁾ は、Go / No-Go 課題を用いた検討を行った。Go / No-Go 課題では、指定された文字が提示された場合にはキーを押す (Go)、あるいはキーを押さない (No-Go) 反応が求められる。Go 刺激が No-Go 刺激よりも多く提示されるため、Go 反応が習慣化される。そのため、「キーを押さない」(No-Go) ためには、習慣的な行動パターンを変える必要があり、コンフリクト・モニタリングが必要となる。政治的イデオロギーを保守であると報告した実験参加者よりも、リベラルと報告した者において課題成績が高く、リベラルは保守よりも No-Go 課題中に前部帯状回 (ACC) が活動し、大きな ERP 反応を示すことが明らかとなった。これらの研究から、保守的な人は身近な政治的脅威に対して敏感であり、環境にある否定的な情報の処理を優先する注意メカニズムを有していること、リベラルな人は状況に応じて柔軟に反応を変えることが可能であり、これらの違いは両者の神経認知機能の差異を反映していると考えられる。

また、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 (UCLA) 神経内科の教授であるマリオ・フェルナンド・メンデスは、政治的イデオロギーの保守とリベラルの差異について、パーソナリティ、認知、生理学、ニューロイメージングの研究領域において検討された研究のレビューを行っている¹⁷⁾。そして、保守的なイデオロギーには、右前半球ネットワーク (右腹内側前頭前野、扁桃核、島皮質前部、および背外側前頭前野を含む) が関わっているのに対して、リベラルの情報処理と反応バイアスには左半球の前部帯状回 (ACC) と関連していると指摘した¹⁷⁾。右前半球ネットワークは、負の刺激、脅威、嫌悪感に対する感度と反応性を高める方向に情報処理を偏らせるように機能し、それら进行处理する個人にとって新しいまたは異なる環境刺激の否定的側面に注意を高め、維持し、それらの刺激のための記憶の発達を促進する働きを有している¹⁷⁾。情報処理における右前半球ネットワークの活動は、変化に抵抗し、安定を維持し、現状を変えないといった、保守的な思考、感情や行動と関連していると考えられる。政治的イデオロギーはパーソナリティや認知、生理など複雑な基盤から成り立ち、脳の機能や構造の個人差を反映している¹⁷⁾。

さらに、オランダのユトレヒト大学の実験心理学者である金井良太は、道徳的基盤と関連する脳部位の構造的な違いについて VBM 解析により分析を行っている¹⁸⁾。灰白質の局所的な量などを定量化する VBM 解析は、性格などの個人差と脳の構造の個人差の対応関係を見出すことが可能である。Kanai ら¹⁹⁾ は、リベラルであるほど前部帯状回の脳領域が大きく、保守であるほど右扁桃核と島皮質前部の脳領域が大きいことを報告している。金井¹⁸⁾ は、これら3カ所の灰白質の量を MRI 画像から抽出することで、個人の政治的イデオロギーをある程度予測できると述べている (p.38)。

近年では、政治的現象と遺伝子の関連も検討されている。例えば、Fowler ら²⁰⁾ は、ロサンゼルス州の投票者の投票記録と双子の登録を照合して、一卵性双生児と二卵性双生児における政治的行動の遺伝率を検討した。投票行動と関わる2つの遺伝子としてセロトニントランスポーター遺伝子と、モノアミンオキシターゼ A 遺伝子の影響を検討し、一卵性双生児の投票行動が二卵性双生児よりも一致しており、投票行動の変動を遺伝子によって説明できる可能性を指摘した。このように、神経政治学という学際領域は、個人の政治的行動や態度をモデル化し、人々の政治的選択を予測する力を劇的に変えようとしている²¹⁾。

Table 1. 政治的イデオロギー(保守主義 / リベラル) に関する研究から示された各領域における特徴

研究領域	高 保守主義	高 リベラル
パーソナリティ	安定；変化への抵抗 同調行動 伝統 順序・構造・閉鎖への欲求 複雑さを好まない、厳密なカテゴリー化 神聖さ 権威 誠実さ 外集団との区別 権威の表現	新規性 型破りな自己表現 新しい経験と感覚 柔軟性と変動性 不確実性と曖昧さに対する寛容さ 害の最小化 平等 共感 ユニバーサルコミュニティ 温かさの表現
認知	ネガティビティバイアス 脅威や損失に対する高い感受性 嫌悪に対する感受性	明確なバイアスを示さない 習慣的な反応パターンを変えるための手がかり に対する感受性
生理	右扁桃体の大きな活性化	葛藤と関連する前部帯状皮質の大きな活性化
ニューロイメージング	右扁桃体および他の右前部構造における 灰白質量の増加	前部帯状皮質の灰白質の増加

Note. Mendez¹⁷⁾ を基に筆者が翻訳

3. 政治的イデオロギーによる極性化が生じるメカニズム

Gentzkow²²⁾ は、アメリカでは政治的イデオロギーが1994年と比較して2014年にはリベラルと保守の差が広がり、極性化 (polarization) していることを指摘した。例えば「ビジネスの政府規制は通常、善よりも害を及ぼす」、「政府はほとんどの場合に無駄で非効率である」という問いに対する共和党員と民主党員の回答は過去10年の間で大きな隔たりが生じ、両党員間の見解の重複は急激に低下している²²⁾。以降では、政治的イデオロギーに基づく極性化に関わる心理的要因とそのメカニズムについて検証した研究の一部を紹介する。

3.1 党派性バイアス (partisan bias)

人々が無意識のうちに自分の政治グループを支持したり、自分のイデオロギーに基づいた信念を好意的に問うかたちで考え行動する一般的な傾向は、党派性バイアス (partisan bias) と呼ばれている²³⁾。例えば、アメリカ人に、「偏った」という言葉が平均的な民主党員と平均的な共和党員をどの程度あらわしているかと尋ねたところ、民主党員であると表明した人々は、民主党員よりも共和党員がかなり偏っていると回答し、共和党員であると回答した人は、共和党員よりも民主党員がかなり偏っていると回答した²³⁾。Dittoら²³⁾ は、これらの結果を踏まえて、18,000名を超えるサンプルを含む51の実験結果をメタ分析し、リベラルと保守の党派性バイアスの程度に差があるか否かを検討した。そして、全体的な党派性バイアスは $r = .245$ でロバストであること、リベラル ($r = .235$) と保守 ($r = .255$) の党派性バイアスは同程度であることを明らかにしている。

党派性バイアスの影響は、偽記憶を取り上げた研究においても確認されている。認知心理学者のエリザベス・ロフタスの研究グループは、自分の政治グループまたは見解をサポートする情報を、それが偽記憶であっても記憶する傾向があることを見出した²⁴⁾。彼らは、偽記憶を扱った研究では最大の5,269人を対象として、3つの真実の政治的出来事と5つの偽造された政治的出来事のうちの、ひとつの記憶を想起するように求めた。そして、参加者の約半数が偽造された出来事が起こったと誤って覚えていたこと、27%は偽造された出来事を「ニュースで見たことを覚えている」と回答したことを報告している。保守はバラ

ク・オバマがイランの大統領と握手を交わしているのを見たことを誤って覚えている傾向が高く、リベラルはハリケーン・カトリーナの災害中にジョージ W. ブッシュが野球の有名人と休暇を取っていることを覚えている傾向が高かったことから、政治的イデオロギーの影響が確認されている²⁴⁾。政治的イデオロギーと一致する出来事は、事実ではなかったとしても、信念と一致するために情報処理の流暢さが高く、ソースモニタリングが阻害されるため、容易に記憶に埋め込まれると考えられる。

3.2 政治的な偽ニュースの拡散とエコーチェンバー(Echo Chamber)

ブログなどの新しいメディアを通じて、ニュースを入手している人びとは、従来の情報源よりもそれらが公平で、信頼性が高く、より詳細に伝えていると感じている²⁵⁾。しかしながら、政治的な偽(フェイク)ニュースが世の中を混乱させることは広く知られている²⁶⁾。これまでの研究から、真実よりも偽ニュースが拡散しやすい傾向があることが明らかになっている。例えば、Vosoughi ら²⁷⁾ は、2006年から2017年にかけて Twitter で配信された検証済の真実と偽ニュース記事の拡散を調査した。対象とされたデータは450万回以上300万人によってツイートされた126,000件の記事であり、政治、都市伝説、経済、テロと戦争、科学技術、エンターテインメント、自然災害の7カテゴリに分類されていた。分析の結果、偽ニュースは全カテゴリにおいて真実よりもはるかに速く、広範囲に拡散することが示された。偽ニュースの上位1%は1,000~100,000人に拡散し、真実はほぼ1,000人以上に拡散しないことが示された。また、政治的な偽ニュースは拡散が顕著であること、偽ニュースは「恐れ、嫌悪感、驚き」の返信を促し、真実は「期待、悲しみ、喜び、信頼」の返信を促すことも示されている²⁷⁾。真実よりも偽ニュースは高覚醒、斬新であるために人々に共有され、受信者の感情的反応を引き起こし、その結果として拡散しやすい可能性があると考えられる。

ソーシャルメディアサイトにおいて偽ニュースが拡散する構造的要因のひとつとしてエコーチェンバー(Echo Chamber)の形成が指摘されている。エコーチェンバーとは、SNSで自分と似た価値観や考え方をもつユーザーをフォローした結果、同じようなニュースや情報ばかりが流通する閉じた情報環境を指す²⁶⁾。Jost ら²⁸⁾ は、政治的保守はリベラルよりも、同調行動や伝統の価値を優先すること、志を同じくする人と現実を共有したいと望む傾向があること、グループ内のコンセンサスを誇張すること、類似した暗黙の社会的つながりや情報源の影響を受けること、均質なソーシャルネットワークを維持する傾向があることを明らかにした。このような保守の心理的特徴は、エコーチェンバーを形成しやすい素地があることを示している²⁸⁾。

また、Van Bavel ら²⁹⁾ は、政治的な問題(同性結婚、気候変動、銃規制など)を含むトピックに関するオンラインのやり取りは、同じイデオロギーを持つ人々の間で共有される傾向があること、リベラルはソーシャルメディア上で異なるイデオロギーを持つ人々が投稿した情報を共有する傾向が保守よりもやや高いこと、オンライン上で政敵を批判することが政治的イデオロギーの極性を増大させることを明らかにしている。これらの研究から、リベラルよりも保守は、エコーチェンバーを形成することで、保守的な政治的イデオロギーと矛盾する情報にさらされにくくなり、偽ニュースの共有や態度の類似性の高まりが生じ、極性化のリスクが上昇する可能性が考えられる。

3.3 政治的マイクロターゲティング(Political Micro-Targeting : PMT)

IBM は personality Insights (性格分析) という1,200単語以上のテキストがあれば、書き手のパーソナリティ(ビッグファイブ、価値、ニーズ)を推測できるサービスを日本では2020年まで提供していた。この例から推察されるように、SNSを利用するユーザーの、「不確実性」や「脅威」を減じたいという認識論的動機と存在論的動機の強さは、SNSを提供する企業にとっては、容易にアクセス可能かつ操作可能

な情報である。Nail ら³⁰⁾の研究では、アメリカでは、2001年の9.11ワールド・トレードセンター崩壊後、一般の人達の多くが政治的に保守に転向したことを報告している。9.11という視覚的な大惨事が恐怖として認識され、いつまたテロが起こるか分からないという「不確かさ」や「脅威」をアメリカ国民が強く感じたことが原因であると考えられる。そうであれば、認識論的動機と実存的動機が強い人々に対して、テロや戦争の脅威など、自国や自国民が攻撃の対象となるという情報を提示することで、保守化を促すことができる可能性がある。

実際に、神経政治学の知見に基づくソーシャルメディアの政治的利用は、Facebook のデータを使用してトランプ政権の選挙対策本部やブレグジット国民投票などにおいて行われたことがケンブリッジ・アナリティカの元社員であるクリストファー・ワイリーによる内部告発から明らかになっている³¹⁾。例えば、神経質なユーザーには「銃が無ければ強盗に殺される」という恐怖を全面に出すコンテンツ、不安を感じやすいユーザーには「ISIS の脅威」を煽る恐ろしいビジュアルなど、選挙の激戦区において説得可能であると捉えられた Facebook フィードにクリエイターが作成したブログや記事、ビデオや広告を配信し、投票行動への誘導が行われていた³¹⁾。

アメリカの選挙キャンペーンのロビー活動で用いられたこのような手法は、政治的マイクロターゲティング (Political Micro-Targeting : PMT) と呼ばれている。PMT は、2016年の米国大統領選挙、欧州連合からの離脱に関する英国の投票、2017年のヨーロッパでの多数の総選挙の予想外の結果を受けて広く関心を集めるようになった³²⁾。PMT は、人々に関する情報を収集し、その情報を使用してターゲットを絞った政治広告を表示することができる。Zuiderveen Borgesius ら³³⁾によれば、政党は、PMT を通じて、説得する可能性が最も高い個々の有権者を特定するだけでなく、送るメッセージを有権者の特定の利益と脆弱性に一致させることができる。そのため、従来の広告より、有権者に対して高い効果が期待できることから PMT を利用する傾向は加速し、アメリカだけではなく、最近ではヨーロッパ諸国でも関心が高まっているという³³⁾。Bodó ら³²⁾は、PMT が、緊密な社会的統制を必要とするような破壊的な可能性を秘めたツールなのか、未知の能力を備えた「単なる」新しい現象なのか、最終的に政治プロセスに組み込むことができるのかについて、まだほとんどわかっていないと指摘しているが、PMT が政治的態度の極性を引き起こすことを示す研究も報告されている³⁴⁾。

3.4 バックファイア効果 (Backfire Effect)

政治的なニュースは、後日その内容が訂正されることもある。代表的な例がイラクの大量破壊兵器の有無に関するニュースであろう。一度報道されたニュースの内容を正すためには、ニュースの修正が必要になるが、政治的な情報の修正が行われると、かえってその誤解を強めてしまうバックファイア効果が生じることがある。Nyhan ら³⁵⁾は、「2000年代初頭のブッシュ大統領の減税が収入を増やした」、「イラクに大量破壊兵器があった」といった誤解のあるニュース記事の修正情報に対する反応が、実験参加者の政治的イデオロギーによって大きく異なることを見出した。「イラクでは大量破壊兵器は発見されていない」というニュースレポートの修正情報は、イラクを最も重要な問題として選択しなかった保守派の人々の誤解を減らすには効果的であったが、最も強くイラク問題にコミットしていた保守派の人々には、その効果はなく、むしろ誤解が強められたのである³⁵⁾。誤った情報の影響を減らすために、訂正情報を繰り返し提示すると、元の情報も撤回のために繰り返されるために、情報処理の流暢さが高まり、誤解を強めてしまうと考えられる。

3.5 非人間化 (dehumanization)

非人間化とは、他者や他集団の人間的な感情や特性 (人間らしさ) を低く認知することである³⁶⁾。選挙

では、対立候補者を非人間化することもある。Falk ら³⁷⁾ は、2008年アメリカ大統領選挙の数か月前に、候補者に対する有権者の意識を神経画像を用いて検討した。対立候補よりも、自分が支持する候補者について考えている時にはメンタライジングに関わる領域である内側前頭前野（mPFC）が活動することが示されたが、選挙が近づくにつれ、両候補について考える時の mPFC 活動の差が拡大し、対立候補に対する活動が低下することが示された³⁷⁾。このような傾向は、対立候補を“こころがない”存在として非人間化を行った結果として解釈できる。また、政治的集団（保守 / リベラル）を内集団として位置づけており、内集団と外集団が道徳的に大きく異なると見なすほど、政治的外集団に属する人々を非人間化する傾向が高まることも示されている³⁸⁾。自らと相いれない政治的イデオロギーを持つ人物を非人間化することは、彼らへの批判的、攻撃的な行動を許容し、互いに歩み寄らない状況を常態化させる危険性をはらんでいる。非人間化は政治的イデオロギーによる社会の極性を加速させる要因のひとつと考えることが出来る。

4. 極性を克服するための心理学的アプローチ

党派性バイアスの生起や、偽ニュースを信じることは簡易な思考パターンであるヒューリスティックが関与している可能性がある。そのため、これらの修正に関する研究は、しばしば二過程理論（dual process theory）に基づくアプローチが取られている。二過程とは、1980年代以降の認知心理学における自動的（automatic）と統制的（controlled）情報処理過程に関する区分である。人間の行う情報処理には、意識的注意を向けながら遂行される統制的過程と意識的注意を比較的伴わずに遂行される自動的過程の2種類があり、状況に応じていずれかが起動すると仮定する二過程理論は、現在、社会心理学や脳科学などの領域において広く共有されている³⁹⁾⁴⁰⁾。

Pennycook ら⁴¹⁾ は、認知能力を測定する認知反射テスト（Cognitive Reflection Test; CRT）⁴²⁾ の得点が高い者は、自らの政治的イデオロギーと一致するニュースヘッドラインであっても、偽ニュースと真実のニュースを識別できることを見出した。ヘッドラインで示されたストーリーが政治的イデオロギーと一致しているかどうかに関係なく、分析的思考を使用して見出しの妥当性を評価することが可能であるという結果は、偽ニュースを信じることは、イデオロギーに基づく偏見ではなく、ヒューリスティックによって引き起こされている可能性を示唆している⁴¹⁾。このような結果は、統制的過程に支えられた分析的思考を行う動機付けを高めることで、偽ニュースの悪影響を緩和できる可能性を示唆している。

しかしながら、認知能力の高さが、イデオロギーに動機付けられた推論を引き起こすことを明らかにした研究も報告されている。Kahan⁴³⁾ は、保守とリベラルに対して、認知能力を測定する認知反射テスト⁴²⁾ を実施し、認知能力には保守派とリベラルの間に差がないことを確認している。そして、イデオロギーに動機付けられた推論は、ヒューリスティックに基づく推論に過度に依存しておらず、むしろ認知能力が高く、情報処理に優れた者が、イデオロギーに動機付けられた認知を示す傾向が最も高かったことを示した。また、Kahan ら⁴⁴⁾ は、人々の見解の対立が続く理由として、「科学的な理解が出来ないため ‘science comprehension thesis’ (SCT)」という仮説と、「アイデンティティを守るため ‘identity-protective cognition thesis’ (ICT)」という仮説を検証した。経験的データから因果推論を引き出す能力を測定する困難な問題への回答を求めたところ、定量的情報を利用する能力が高い参加者は、データが「新しい皮膚発疹治療の研究結果」として提示された場合、能力が低い者よりも正確に回答した。しかしながら、同じデータがイデオロギーを反映する「銃規制の研究結果」として提示された場合、回答は政治的に二極化され、正確ではなくなった。回答の歪みは、認知能力が高い人において減少せず、むしろ増加したことが示されている。このような結果は、SCT よりも ICT を支持しており、高い定量的推論能力を持つ者は、眼前のデータを自分の政治的イデオロギーと最も一致するように解釈する傾向があることを示唆している。

統制的過程は実行機能（Executive Functions; EFs）が支えており、実行機能の基本的な側面（ワーキ

ングメモリ操作、行動制御、タスク切り替え)が駆動することで、人は自ら行動を状況や目標に合わせて適切に制御することができる⁴⁵⁾。実行機能トレーニングは、学業成績の向上、依存などの健康リスクの低減、対人関係の問題を改善する効果があることが確認されている⁴⁵⁾⁴⁶⁾。しかしながら、政治的イデオロギーや党派性バイアスには、個人のアイデンティティが深く関わっているため²⁹⁾、これらが引き起こす問題の解消は、実行機能を高めるだけでは十分ではない可能性がある。学業や健康問題のように「正しい」とされる自己制御行動が自明ではないためである。

人々はヒューリスティックの結果として政治的イデオロギーと一致する情報を選択するのではなく、自らのアイデンティティを守るために、推論能力を駆使して、政治的イデオロギーと一致する情報を積極的に選択している。そうであれば、トレーニングによって実行機能を高めたとしても、その力を自らとは相いれないイデオロギーを持つ人を排除するために用いる可能性がある。吉田⁴⁷⁾はワーキングメモリキャパシティ高群が低群よりも、感染脅威が高まり、感染回避目標が活性化した場合にはスティグマのある外集団成員を排除することを明らかにした。他者を遠ざけることが適応的な行動である時、優れた実行機能を持つ者ほど排他的な反応を示したのである。そのため、党派性バイアスの解消のためには、トレーニングにより実行機能を高めるとともに、個人が置かれた状況下でどのようなイデオロギーやアイデンティティが活性化されるか、すなわちどのような自己制御目標が喚起されるかに対しても考慮する必要がある。政治的イデオロギーに基づく極性化の解消には、アイデンティティの観点を含めた検討²⁹⁾が強く求められている。

おわりに

政治的イデオロギーの個人差が生じるメカニズムは政治心理学や政治神経科学 / 神経政治学の発展に伴い急速に解明が進んでいる。一方、人々を取り巻くメディアや情報環境の変化により、政治的イデオロギーによる極性化を解消する道は険しいと言わざるを得ない。政治的イデオロギーによる極性化が進むことで、社会関係資本の減少、経済的不平等の拡大、科学への信頼の低下、メディアの状況の細分化など、様々な問題が進むことが懸念される。今後、心理的原則を組み込んだ技術的解決策⁴⁸⁾が益々求められるであろう。克服するための第一歩は、Jost¹²⁾が指摘しているように、「政治的なイデオロギーの違いを軽視しないこと」であろう。人を特定の信念に固執する存在として捉えるのではなく、確実性、安全性、社会的帰属に対する欲求を満たすための認識論的または存在論的動機に基づいて、特定の信念に共鳴している存在として認識すること¹²⁾が必要である。また、Lewandowskyら⁴⁹⁾は、バックファイヤ効果を抑制し、誤った情報の拡散を防ぐ方法として、「伝えたい事実を強調したシンプルな資料を作ること」、「コンテンツが受け手の世界観や価値観を脅かさないかどうか吟味すること」、「コンテンツを受け手の世界観を肯定する方法で提示すること(リスクや脅威ではなく、機会や潜在的な利益に焦点を当てる)」などを提案している。小さな工夫のように見えるこれらの取り組みが重ねられることで、大きな変化が生じるものと期待する。

謝辞

本稿の一部は、「日本における保守化・右傾化の構造」研究会において発表された。発表の機会を与えていただいた長谷川雄一先生に感謝いたします。本稿の執筆に際して文部科学省科学研究費補助金(基盤C:課題番号20K03312)の助成を受けた。

引用文献

- 1) Westfall, J., Van Boven, L., Chambers, J. R., Judd, C. M. "Perceiving political polarization in the United States: Party identity strength and attitude extremity exacerbate the perceived partisan divide" *Perspectives on Psychological Science*, **10** (2), 145-158, 2015
- 2) Graham, J., Haidt, J., Motyl, M., Meindl, P., Iskiwitch, C., Mooijman, M. "Moral Foundations Theory" *Atlas of Moral Psychology*, 211, 2018
- 3) Haidt, J., Graham, J., Joseph, C. "Above and below left-right: Ideological narratives and moral foundations" *Psychological Inquiry*, **20** (2-3), 110-119, 2009
- 4) Graham, J., Haidt, J., Nosek, B. A. "Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations" *Journal of personality and social psychology*, **96** (5), 1029, 2009
- 5) Haidt, J. "The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion" *Vintage*. 2012 (ハイト, J. 高橋洋 (訳) 『社会はなぜ左と右にわかれるのか－対立を超えるための道徳心理学』 紀伊国屋書店, 2014)
- 6) 村山綾・三浦麻子「日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証－イデオロギーとの関係を通して－」『心理学研究』**90**, 156-166, 2019
- 7) Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., Ditto, P. H. "Mapping the moral domain" *Journal of personality and social psychology*, **101** (2), 366, 2011
- 8) Smith, K. B., Alford, J. R., Hibbing, J. R., Martin, N. G., Hatemi, P. K. "Intuitive ethics and political orientations: Testing moral foundations as a theory of political ideology" *American Journal of Political Science*, **61** (2), 424-437, 2017
- 9) Jost, J. T., Glaser, J., Kruglanski, A. W., Sulloway, F. J. "Political conservatism as motivated social cognition" *Psychological bulletin*, **129** (3), 339, 2003
- 10) Jost, J. T., Amodio, D. M. "Political ideology as motivated social cognition: Behavioral and neuroscientific evidence" *Motivation and Emotion*, **36** (1), 55-64, 2012
- 11) Jost, J. T., Nam, H. H., Amodio, D. M., Van Bavel, J. J. "Political neuroscience: The beginning of a beautiful friendship" *Political Psychology*, **35**, 3-42, 2014, p.17
- 12) Jost, J. T. "Ideological asymmetries and the essence of political psychology" *Political psychology*, **38** (2), 167-208, 2017
- 13) Lieberman, M. D., Schreiber, D., Ochsner, K. N. "Is political cognition like riding a bicycle? How cognitive neuroscience can inform research on political thinking" *Political Psychology*, **24** (4), 681-704, 2003
- 14) Oxley, D. R., Smith, K. B., Alford, J. R., Hibbing, M. V., Miller, J. L., Scalora, M., Hatemi, P., Hibbing, J. R. "Political attitudes vary with physiological traits" *Science*, **321** (5896), 1667-1670, 2008
- 15) Carraro, L., Castelli, L., Macchiella, C. "The automatic conservative: Ideology-based attentional asymmetries in the processing of valenced information" *PLoS One*, **6** (11), e26456, 2011
- 16) Amodio, D. M., Jost, J. T., Master, S. L., Yee, C. M. "Neurocognitive correlates of liberalism and conservatism" *Nature neuroscience*, **10** (10), 1246, 2007
- 17) Mendez, M. F. "A neurology of the conservative-liberal dimension of political ideology" *The Journal of neuropsychiatry and clinical neurosciences*, **29** (2), 86-94, 2017, p.87
- 18) 金井良太『脳に刻まれたモラルの起源』岩波書店, 2013
- 19) Kanai, R., Feilden, T., Firth, C., Rees, G. "Political orientations are correlated with brain structure in

- young adults" *Current biology*, **21** (8), 677-680, 2011
- 20) Fowler, J. H., Baker, L. A., Dawes, C. T. "Genetic variation in political participation" *American Political Science Review*, **102** (2), 233-248, 2008
 - 21) Schreiber, D. "Neuropolitics: Twenty years later" *Politics and the Life Sciences*, **36** (2), 114-131, 2017
 - 22) Gentzkow, M. "Polarization in 2016" *Toulouse Network for Information Technology Whitepaper*, 1-23, 2016
 - 23) Ditto, P. H., Liu, B. S., Clark, C. J., Wojcik, S. P., Chen, E. E., Grady, R. H., Gelniker, J. B., Zinger, J. F. "At least bias is bipartisan: A meta-analytic comparison of partisan bias in liberals and conservatives" *Perspectives on Psychological Science*, **14** (2), 273-291, 2019
 - 24) Frenda, S. J., Knowles, E. D., Saletan, W., Loftus, E. F. "False memories of fabricated political events" *Journal of Experimental Social Psychology*, **49** (2), 280-286, 2013
 - 25) Johnson, T. J., Kaye, B. K. "Wag the blog: How reliance on traditional media and the Internet influence credibility perceptions of weblogs among blog users" *Journalism & mass communication quarterly*, **81** (3), 622-642, 2004
 - 26) 笹原和俊 「ウェブの功罪」『情報の科学と技術』 **70** (6), 309-314, 2020
 - 27) Vosoughi, S., Roy, D., Aral, S. "The spread of true and false news online" *Science*, **359** (6380), 1146-1151, 2018
 - 28) Jost, J. T., van der Linden, S., Panagopoulos, C., Hardin, C. D. "Ideological asymmetries in conformity, desire for shared reality, and the spread of misinformation" *Current opinion in psychology*, **23**, 77-83, 2018
 - 29) Van Bavel, J. J., Pereira, A. "The partisan brain: An identity-based model of political belief" *Trends in cognitive sciences*, **22** (3), 213-224, 2018
 - 30) Nail, P. R., McGregor, I. "Conservative shift among liberals and conservatives following 9/11/01" *Social Justice Research*, **22** (2-3), 231-240, 2009
 - 31) Wylie, C. "Mindf*ck: Inside Cambridge Analytica's Plot to Break the World" *Profile Books*, 2019 (ワイリー, C. 牧野洋 (訳) 『マインドハッキングーあなたの感情を支配し行動を操るソーシャルメディア』新潮社, 2020)
 - 32) Bodó, B., Helberger, N., de Vreese, C. H. "Political micro-targeting: a Manchurian candidate or just a dark horse?" *Internet Policy Review*, **6** (4), 1-13, 2017
 - 33) Zuiderveen Borgesius, F., Möller, J., Kruikemeier, S., Ó Fathaigh, R., Irion, K., Dobber, T., Bodó, B., de Vreese, C. H. "Online political microtargeting: promises and threats for democracy" *Utrecht Law Review*, **14** (1), 82-96, 2018
 - 34) Prummer, A. "Micro-targeting and polarization" *Journal of Public Economics*, **188**, 104210, 2020
 - 35) Nyhan, B., Reifler, J. "When corrections fail: The persistence of political misperceptions" *Political Behavior*, **32** (2), 303-330, 2010
 - 36) Haslam, N. "Dehumanization: An integrative review" *Personality and social psychology review*, **10** (3), 252-264, 2006
 - 37) Falk, E. B., Spunt, R. P., Lieberman, M. D. "Ascribing beliefs to ingroup and outgroup political candidates: neural correlates of perspective-taking, issue importance and days until the election" *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, **367** (1589), 731-743, 2012

- 38) Pacilli, M. G., Roccato, M., Pagliaro, S., Russo, S. "From political opponents to enemies? The role of perceived moral distance in the animalistic dehumanization of the political outgroup" *Group Processes & Intergroup Relations*, **19** (3), 360-373, 2016
- 39) Evans, J. S. B. "Dual-processing accounts of reasoning, judgment, and social cognition" *Annu. Rev. Psychol.*, **59**, 255-278, 2008
- 40) Kruglanski, A. W., Orehek, E. "Partitioning the domain of social inference: Dual mode and systems models and their alternatives" *Annu. Rev. Psychol.*, **58**, 291-316, 2007
- 41) Pennycook, G., Rand, D. G. "Lazy, not biased: Susceptibility to partisan fake news is better explained by lack of reasoning than by motivated reasoning" *Cognition*, **188**, 39-50, 2019
- 42) Frederick, S. "Cognitive reflection and decision making" *Journal of Economic perspectives*, **19** (4), 25-42, 2005
- 43) Kahan, D. M. "A risky science communication environment for vaccines" *Science*, **342** (6154), 53-54, 2013
- 44) Kahan, D. M., Peters, E., Dawson, E. C., Slovic, P. "Motivated numeracy and enlightened self-government" *Behavioural Public Policy*, **1** (1), 54-86, 2017
- 45) Hofmann, W., Schmeichel, B. J., Baddeley, A. D. "Executive functions and self-regulation" *Trends in cognitive sciences*, **16** (3), 174-180, 2012
- 46) García-Madruga, J. A., Gómez-Veiga, I., Vila, J. Ó. "Executive functions and the improvement of thinking abilities: The intervention in reading comprehension" *Frontiers in psychology*, **7**, 58, 2016
- 47) 吉田綾乃「感染脆弱意識とワーキングメモリキャパシティがステイグマ集団への態度に及ぼす影響」日本社会心理学会第60回大会, 2019
- 48) Lewandowsky, S., Ecker, U. K., Cook, J. "Beyond misinformation: Understanding and coping with the "post-truth" era" *Journal of applied research in memory and cognition*, **6** (4), 353-369, 2017
- 49) Lewandowsky, S., Ecker, U. K., Seifert, C. M., Schwarz, N., Cook, J. "Misinformation and its correction: Continued influence and successful debiasing" *Psychological science in the public interest*, **13** (3), 106-131, 2012